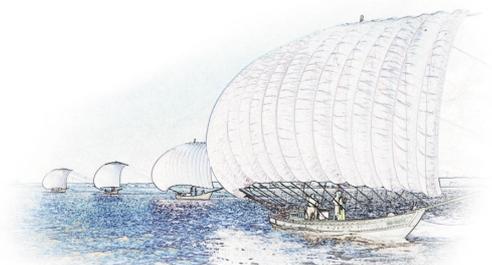


特集

Column 2

Folklore of Hobikisen Sailboats Fishing by Net-Casting Method



帆引き網漁の昔がたり

優

雅なシルエットが美しい帆引き船ですが、漁の現実は一層厳しいものでした。かすみがうら市出身の折本良平が明治13年に帆引き船を開発してから、トロール船による漁が主流となる昭和40年ごろまでの間、漁師たちは自分たちの腕を頼りに漁を行ってきました。当時の漁の姿を紹介します。漁は、通常夜間に行われました。陽が傾いたころ、漁師たちは向かい風に向かって櫓を漕ぎ出しま



す。風の具合や温度、その日のさまざまな条件によって、どこかの漁場が良いか判断します。腕の良い漁師たちは「今日はあの辺りがいいな」と同じことを考えるので、いかに早く良い場所をとるかも勝負どころでした。漁場に着くと網を水中に投げ入れ、帆を開きます。腕の強い漁師ほど、短い時間で遠くまで風上に漕いで、長い距離を網で引くことができる。、それだけ魚を多くとることができるというわけです。

しかし、帆引き網漁は、風頼み腕頼みといわれ、風がなければどうしようもありませんでした。そんなときは、あきらめて船の上で寝ていたりしたそうです。一方で、風が強くなると船は激しく揺れ、帆を上げるのも網を上げるのも一苦労でした。判断をあやまると、強風であおられて転覆してしまうこともあり、天候を読むことも、漁師の大切な能力のひとつでした。

現在、観光帆引き船で使われている帆や網はナイロン製ですが、

当時は木綿のものでした。特に網は、手入れをしないと腐ってしまったり、毛羽立つと水切りが悪くなって速力が出ないため、魚がとれなくなってしまう、網を定期的には柿渋で煮て、手入れを行っていました。

柿渋は漁師の家ごとに柿の実を煮てつくっていました。たくさんの柿が必要となるため、柿の木のあるお宅へ買いに行ったりです。霞ヶ浦地区に柿の木が多いのも、そんな理由があったからではないかといわれています。霞ヶ浦の恵みを享受しながら、自然を相手に知恵と経験でもって漁をなしていた人々の生き方に、今を生きる私たちも多くのことを学ぶことができます。

